

§4 問答の観点からの推論

1, 推論は、問いを前提する:理論的推論の場合

2, 推論は、問いを前提する:実践的推論

(1)実践的推論の定義

(2)アンスコムとウリクトの論争

■実践的推論についての二つの理解

アンスコムは、実践的推論を「私は何をなすべきか(どうすべきか)・qすべきか」という「熟慮的観点」からの推論であるとする。

ウリクトは、実践的推論を、「早川は何をしているのか」「なぜ早川はqしたのか」という「解釈的観点」からの推論である、とする。

—————本日ここから

(3)実践的知識と実践的推論の関係

●実践的知識≠行為拘束型発話

この場合の実践的知識「カレーを作っています」は、真理値を持つ。その点で、これは「あなたはなにを作ってくれますか」と問われて「カレーを作ります」と答えるときの行為拘束型発話とは異なる。これは真理値を持たない。

ところで、「カレーを作っています」という発話は、観察によらない知である。しかし、観察によって、偽となることがないということはない。たとえば、カレーのルーのつもりでつくっていたのだが、まちがってハヤシライスのルーを入れて作っていたとわかることもありうる。

●実践的知識が間違っていたとき、私たちはどうするのか。

「何をしているの？」

「コーヒーを淹れています」

これは、真理値を持つ。しかし、それが間違っていたら、テオフラストスが言うように、「間違いは行為にあって、判断にはない」(Intention, §2, §45) これはどういう意味だろうか。

もし間違いに気づいたら、例えば、コーヒーのつもりが、ココアを入れていることに気づいたら、私は行為のほうを変えて、コーヒーを入れなおすだろう。しかし、この場合であっても、間違いに気づくとは、「コーヒーを淹れている」が偽であったということである。その意味では、「間違いは、行為にも、それについての判断にもあった」というのが正しいのではないだろうか。

もしテオフラストスの言葉が正しいとすると、「間違いは判断にはない」というのは次のような意味であろう。<「コーヒーを淹れています」というのは、意図的行為を表現しているのであり、「コーヒーを淹れる」という意図が間違っていたということではない。意図には適不適の区別はあっても、真偽の区別はない。したがって、この意図が偽であったということはありません、またこの場合、この意図が不適切であったということもない。

仮に、私がコーヒーをあきらめて、ココアで我慢することにして、そのままココアを作るとしよう。そのときでも、「コーヒーを淹れる」という意図が偽であったということも、不適切であったということもない。

●実践的知識は実践的推論の結論となる

次の例で考えよう。

「なにをしていますか」

①「カレーを作っています」

「何故カレーを作っているのですか」

②「2日持つからです」

「何故カレーを作っているのですか」の答えは、「カレーは2日持つから、私はカレーを作っています」である。

この理由と行為の関係は、つぎの実践的推論を構成している。

私は料理に時間を取られたくない。

カレーは2日持つ

カレーを作れば、料理の時間を節約できる

ゆえに、私はカレーを作っている

ちなみに、ここで「何故カレーを作っているのですか」という問いの答えもまた、観察によらず、推論にもよらず、即座に得られる。この問いに答える作業は、行為の理由を見つける作業であり、言い換えると、上記の実践的推論のひとつの前提を見つける作業である。したがって、「何故」の問いに答えるために、実践的推論をするのではない。むしろ「何故」の答え(行為の理由)をもとに、私たちは実践的推論を構成し、それによって行為の合理性を理解する。

一般化して説明しよう。実践的知識は、「私はYしている」という形式をもつ。「あなたはなぜYしているのですか」という問いに対する答えは、「私は、Xしたいので、Yしているのです」という形式を取る。ここで成立する実践的推論は次の図式になる。

推論A

私はXしたい。

私はYすることによって、Xすることができる。

私はYしている

この結論は「私はYしている」である。これは(意図的)行為の記述である。つまり、結論は真理値をもつ。

この推論が、実践的推論であるためには、前提の中に真理値を持たない文が含まれている必要がある。全ての前提と結論が真理値をもつ文なら、それは理論的推論である。第二の前提は、真理値をもつ文である。それゆえに、もし第一の前提「私はXしたい」が真理値を持たない文であるなら、それは実践的推論であり、それが真理値をもつ文なら、それは理論的推論である。

現実の推論は、文の関係としてより、発話の関係として考えるべきであろう。「私はXしたい」の発話が、意図表明の発話であるなら、それは真理値をもたない。それゆえに、この推論は実践的推論である。もし「私はXしたい」の発話が真理値を持つ発話だとすると、それは、私が何を意図しているのかという事実について記述している発話である。このように理解するならば、上記の推論は理論的推論である。

●行為内意図を表明することはできない。

実践的知識を結論とする実践的推論は、次のような形式で考えることができるかもしれない。

推論B

私はXしたい。(事前意図ないし欲求)

私はYすることによって、Xする。(事実言明)

私はYする。(行為内意図)

しかし、このような推論はありうるだろうか。

この推論は、どのような問いに答えるために行われるのだろうか。

推論Aは次の問いに答えるために行われる。

「あなたは、何をしていますか」(事実を尋ねる問い)

「私は、Yしています」

この問の答えは、事実の記述である。

では、推論Bは、次の問いに答えるために行われるのだろうか。

「あなたは何をしますか」(意図を尋ねる問い)

「私はYします」

このような問いの答えは、日本語では、行為内意図 (intention in action) ではなく、事前意図 (prior intention) を表現している。もし「私はYします」が行為内意図を表現しているのだとすると、このような問答の答えとはならない。

「事前意図」(prior intention) は、「行為内意図」(intention in action)との対比で使用される用語であり、意図している行為が、まだ始まっていない場合の意図である。それに対して「行為内意図」というのは、意図している行為が進行中の意図である。たとえば、信号が青になったら発車しようと思っっているときの「発車しよう」という意図が事前意図であり、実際に青になって発車しているときの意図が、行為内意図である。

(この定義からすると「この講義の単位をとろう」は行為内意図でしょうか、事前意図でしょうか。

「結婚しよう」はどうでしょうか。「幸せな人生を送ろう」はどうでしょうか。これは、事前意図でしょうか。行為内意図でしょうか。それとも状況ないし行為をどのように記述するかに応じて、意図表明も変化するのでしょうか。

ミニレポート課題1:上記のような例をもとに、事前意図と行為内意図の区別への反論、あいまいな事例のあいまい性の説明、などを書いてください。)

●行為内意図を表明することはできない

行為内意図を問いたいときには、私たちは通常は、「あなたは何をしていますか」と問うだろう。そして、この答えは、「私はYしています」のような行為の記述になる。しかし、もちろん行為をしている時には、常に行為内意図が伴っているので、これで行為内意図を知ることができる。

行為内意図を尋ねるもう一つの問い方は、次のようなものである。

「あなたは何をしているつもりですか」

「私はYしているつもりです」

しかし、これは行為内意図についての記述であって、行為内意図の表明ではない。

では、つぎはどうだろうか。

「あなたはなにをしようとしていますか」

「私はXしようとしています」

しかし、これはおそらく事前意図の記述になるだろう。

以上からいえることは、(少なくとも日本語では) 私たちが行為内意図の表明を答えとするような問いを持たないということである。(日本語以外の言語では、そのような問いがあるかもしれない。) そうすると(すくなくとも日本語では) 推論Bは、現実にはありえない推論である。

英語では、つぎのように考がえられるのだろうか。

・未来の行為を記述するには、“I shall do X” と言い、

・事前意図を表明するには、“I will do X” と言う。

・現在の行為を記述するには、“I do X” あるいは “I am doing X” と言えるが、

・行為内意図を表明する表現はないのではないか。

“I am doing S and have simultaneously an intention to do X. これは行為内意図の記述である。

(ミニレポート課題2: もし反論があれば、ぜひお願いします。)

●結論前半: 従って、実践的知識は、推論図式Aのタイプの実践的推論の結論である。

(私は従来、論文や講義で、実践的知識は実践的推論の結論ではない、と主張してきました。主張が変わったのは、実践的知識についての理解が変化したためではなく、実践的推論の定義を広くしたためです。)

●この結論は、アンスコム的主張と一致する。

アンスコムはアリストテレスの実践的三段論法について次のように述べているからである。

「アリストテレスの説明のもつ重要性は、それが、行為が意志的になされる場合には必ず存在する一つの秩序を記述しているという点にあるのである」(*Intention*, § 42)

アンスコムは、(明言する箇所は少なくとも *Intention* の中にはないが) 実践的知識は、実践的推論の結論になると考えていたのだろうと思われる。

しかし、アンスコムは、実践的知識が「観察によらない知識」であるというだけでなく、「推論」によって知るのでもないという。

「ひとが、Zが生じていることを観察や推理等によって知るかぎり、その知識は我々が自分の意志行為についてのもつ知識ではない」(*Intention*, § 28)

もしここでの「推理」が理論的推論のことであるとすると、この発言は、実践的知識が、実践的推論の結論であることと矛盾しない。また、ここでの推論が実践的推論を含むとしても、この発言は(次に述べるように)、実践的知識が実践的推論の結論であることと矛盾しない。

●結論後半: しかし、「何をしていますのですか」と問われて答えるとき、私たちは「実践的推論」を行っていない。

行為を決定するときには、実践的推論を行っているだろう。しかし「何をしていますのですか」と問われて「コーヒーを淹れています」と答えるときには、行為を決定しているのではなく、報告しているだけである。つまり、実践的推論をおこなっているのではなく、すでに行われた実践的推論の結論を報告しているだけである。

●次のアンチテーゼをどう解決するのか?

テーゼ: すべての知識は、推論の結論である。ゆえに実践的知識も推論によって得られる知識である。

アンチテーゼ: 実践的知識は、推論によらないで得られる知識である。

解決: 実践的知識が形成されるのは、実践的推論の結論としてなので、テーゼは成り立つ。

他方、「何をしていますのですか」という問いに対する答えとしての実践的知識は、すでにもっている実践的知識を反復するだけである。ゆえにアンチテーゼも成り立つ。このように考えると、アンチテーゼは、実践的知識を理解するには推論の結論として理解する必要があるという主張とは矛盾しない。

補足: しかし、「なにをしていますのですか」と問うて、「カレーを作っています」という返答を聞いたものは、その返答を理解するときに、推論を必要とするのだろうか。質問者がその答え理解するとき、「あなたはカレーを作っている」とか「Hさんはカレーを作っている」という命題として理解する。このとき、相手の「(私は)カレーを作っています」の「私」を「あなた」や「Hさん」に置き換える必要がある。この推論は、「相手の「カレーを作っています」という発言は、引用を解除すると、どういう意味になるのだろうか」という問いに答えるための推論である。

補足2: